

笛が形成する平敦盛

——篳篥・横笛から青葉の笛へ——

田代幸子

はじめに

『平家物語』巻第九「敦盛最期」は、笛を愛好する風流な公達・敦盛と、それを涙ながらに討たざるをえなかった熊谷直実の哀話として、広く知られ、また人々にこよなく愛されてきた一話である。熊谷が出家を決意するのは、むろん自ら手にかけてた敦盛が、我が子小次郎と同年代であることも大きく作用しているようだが、それ以上に、覚一本「敦盛最期」の構造として熊谷出家の機縁に大きく関わるのは、敦盛が携えていた笛である。覚一本では「敦盛最期」は以下のように結ばれる。^{注1}

狂言綺語のことはりと言ひながら、遂に讃仏乗の因となるこそ哀なれ

仏道のさまたげとなる、人々の心をまどわす作り物語や詩歌同様、本来、管絃も「狂言戯事」として人々をまどわす魅力をもつものでありながら、それゆえに仏道へ導きうるものでもあった。^{注2} 討たれた敦盛が笛を携えていたからこそ、熊谷はより一

層嘆きを深くし、笛は義経の見参にいれられて人々の涙を誘うものにもなりえ、そして熊谷は発心の思いを進める。形見が刀や着衣ではなく、戦場にはあまりに似つかわしくない優美な笛であり、しかもその笛を死ぬまで肌身離さないまま討たれたゆえに覚一本の「敦盛最期」はいっそう哀切な物語となり、熊谷の発心譚ともなりえた。

しかし、これほどに笛は「敦盛最期」における重要なツールでありながら、諸本によつて敦盛が携えていた笛には揺れが見られる。覚一本では「錦袋にいれたる笛をぞ、腰にさ、れたる」と表現された笛は、延慶本では「漢竹ノ篳篥ノ色ナツカシキヲ、紫檀ノ家ニ入テ、錦ノ袋ニ入ナガラ、鎧ノ引合ニ指レタリ」とあるうえ、「巻物」も併せ持つ。また、笛の名称も覚一本は「小枝」、延慶本は「月影」。笛を差していた場所もそれぞれ「腰」と「鎧ノ引合」と相異している。

本論では、この諸本間における敦盛の遺した笛の相異に着目し、笛に担わされる役割の考察とともに、能や幸若舞となった

後世の敦盛も視野に入れつつ、敦盛伝承そのものの形成について考察することを目的とする。^{注4}

一、靈験を発揮する笛、箏

敦盛が遺した笛について諸本間の揺れが見られることは、大系本などの諸注釈や『平家物語研究事典』にもすでに指摘される^{注5}ところである。横笛と明記するものおよび、ただ笛と記すものを「横笛」とすると、笛の種類は、横笛（龍笛）と箏の二種に大別できる。諸本をより詳細に考察された佐谷真木人氏によると、箏をもつ諸本は延慶本と長門本になり、また両本とも箏のみではなく巻物を併せ持っている。古態を有する延慶本が敦盛の遺品を箏と明記することは注目に値しよう。さらに注目すべきは、延慶本においては「是ヨリシテゾ熊谷ノ発心ノ心ヲバオコシケル」とされる動機は笛ではなく、熊谷が箏と巻物にそえて敦盛の父経盛に送った書状に対する経盛の返状にある。たしかに、同じ年頃の息子を持つ身であることが強調されている物語であれば、風流な笛よりも息子を亡くした父の思いに発心の心を起こすほうが、より理にかなっているように思う。ところで箏といえは、多く説話に用例が見られる笛であり、ことによく知られているのが、源博雅の説話である。以下にその概略をみたい。

博雅三位宅に盗賊がはいった。盗賊が箏以外のすべてを奪って逃走したあと、博雅は床下から這い出しがらんどどうになつた屋敷でたったひとつだけ残った箏を吹く。するとすでに逃

げ出していたはずの盗賊はその音色のすばらしさに感動して改心し、すべての家財を返しにくる。

この説話は『古今著聞集』巻第十二・偷盜・四二九のほか、『続教訓抄』第十一冊にも見られる。ほかにも箏の説話には『古今著聞集』内だけでも、海賊に遭った箏師用光が吹いた箏で海賊を感涙させ、命が助かった話（巻第十二・偷盜・四三〇）、箏吹遠正が箏を吹き雨請を成功させた話（巻第六管絃歌舞・二五〇）があり、箏には人心を失ったような盗賊たちをも改心させ、さらには自然や神すら動かしよう力があると認識されていたことがうかがえる。熊谷と敦盛が対峙したときに箏の音が響くわけではなく、敦盛の懐中から死後に発見されるのみであるが、ここで敦盛が携えていた笛が箏であったことが、すなわち改心の神通力を持つ笛として、のちに語り本で確立されていく熊谷発心説話を生む原動力になったのではないだろうか。

では、同じ年頃の息子を持つ父の悲哀から発心の心を起こすという、より自然な物語の展開に無理を生じさせてまで、熊谷発心譚の中心が笛に据えられていくにあたって、なぜその笛の種類を靈験あらたかな箏のまま、敦盛説話を諸本は伝えなかったのであろうか。続けて『古今著聞集』巻第八・好色・三一九における箏説話の用例を見てみたい。

醜男・敦兼の北の方は美貌の持ち主であったが、夫の醜貌を恥に思い、口もきかず、同じ部屋にも住まわず、敦兼が帰宅しても女房たちに世話すらさせない。仕方なく敦兼は物思いにふ

けりつつ、朗詠を繰り返して語う。その声のすばらしさに、北の方のころも和らぎ、夫婦仲は円満になった。

ここで北の方の心を氷解させたものは美声の朗詠であったが、敦兼は箏篋の名手としても名高く、朗詠の直前には調子をとるべく箏篋を吹いている。敦兼は『箏篋師伝相承』にも名を連ね、『著聞集』巻第六・管絃歌舞・二六七では鳥羽天皇の御遊後宴の催馬楽において箏篋を吹いた人物としてもその名があがっている。それだけ箏篋の名手としての名が知られつつ、その醜貌は説話の題材になるほどでもあった敦兼の存在により、箏篋の担い手といえ、すなわち醜貌。という固定概念を形成させていたとしても不思議はない。

さらに箏篋についての言及といえ『枕草子』があまりにも有名である。清少納言は「笛は横笛、いみじうをかし」と述べる一方「箏篋は、いとかしがましく、秋の虫のいは、響虫の心ちして、うたてぢかく聞かまほしかず」と一蹴する。この段で清少納言は、まず横笛についてなにもかすがすばらしいと絶賛し、ついで箏を音は「をかし」といつつ「さてふく顔やいかぞ。それは横笛もふくなしめりかし」と擁護をしつつも、横笛ほど思い入れが強くはなさそうな見解を示し、箏篋への苛烈な集中砲火へと箏談義を展開させる。箏篋について言及する批難は音にのみ集中しているが、先の箏が演奏時の顔について言及されているところを鑑みると、音のみならず吹く際の表情にも言わずもがな否定的見解を持っていたのではないだろうか。事実、縦笛でリード楽器である箏篋は頼に息をためて大きくふ

くらませつつ吹かねばならない。

箏篋は三管の中で最も小さな楽器でありつつ、横笛や笙とは比べものにならない大音量を出す。博雅三位邸からすでに逃亡していた盗賊の耳まで届くのもその音量あつてこそであろう。また三管を、横笛（龍笛）を龍、笙（鳳笙）を鳳に見立てたとき箏篋は人の声にあたるという。敦兼の朗詠が北の方の心を動かし、また『梁塵秘抄口伝集』で人の声による今様こそが神々に通じるものであり、そもそも古来より祝詞は人の声であげられてきたことからしても、箏篋はいかにも鬼神をも動かす力を持つにふさわしい笛である^{註6}。だがその一方で、その担い手は敦兼のような醜貌の持ち主であり、『懐竹抄』で「大箏篋の上手」とされる博雅三位にしても『大鏡』や『小右記』では奇矯の人として知られており、箏篋の持ち主には滑稽ともいえる印象がつきまとう。

延慶本が敦盛に所持させた箏篋は、敦盛説話が笛に集約されていく原動力でありつつ、「十五六計ナル若人ノ色白ミメウツクシクシテ、薄気装シテ、カネ黒也。鮮媚タル両髪ハ秋ノ蟬ノ羽ヲ並べ、苑転タル双峨ハ遠山ノ色ニマガヘリナムド云モ、カクヤト覚テ哀也。」（延慶本）というほどの、美少年敦盛にはあまりにふさわしからぬ所持品であつたに違いない。

二、貴公子たちがもつ笛、横笛

一方、敦盛が横笛を持つ諸本は、覚一本・百二十句本・四部合戦状本があげられる。箏篋にあつたような靈験が横笛におけ

る説話にも見られないか確認してみたところ『古事談』巻六・十一に伶人助元が笛で還城楽を吹き、蛇蝎の難を逃れるという説話があった。ただし、これは笛の音色そのものの効力ではなく、「還城楽」という曲じたいに蛇蝎を退ける力が認められる。還城楽は舞楽曲で、『教訓抄』によると「西国之人好テ蛇ヲ食トス、其蛇ヲ求メ得テ悦姿、不可説間、模_レ其_レ躰、作_レ此舞_レ之」とあり、蛇蝎は横笛の音色そのものにおそれをしたのではなく、同曲が具有する舞楽曲としての内容によって退けられたに過ぎない。

しかし、箏築のような人智を超えた力は持たずとも横笛が物語などに描出されることじたいはきわめて多い。横笛が大いに活躍する作品としては、まず『源氏物語』が知られよう。桐壺巻で光源氏が藤壺と「琴笛の音に聞こえ遊び」とあるのを筆頭に、頭中将、夕霧、柏木ら物語の主要な貴公子たちがつぎつぎに笛の名手として登場する。ことに物語上重要になるのが、横笛巻の巻名ともなった柏木遺愛の笛である。亡き柏木の笛は遺族から一度は夕霧に譲られるも、源氏を経て柏木の遺児・薫にわたり、宇治十帖では薫が笛の名手として、柏木に似た音を奏でることにより、知られてはいけけないはずの肉親の血筋が笛の音によって露見したといっても過言でない。利澤麻美氏は「『源氏物語』の中で、横笛は、若き貴公子の象徴として描かれている。男女の交渉の場に必須のものであり、常に懐にし、そこから生まれる愛器への思い入れも深いものである。横笛巻の柏木遺愛の笛を巡る物語も、その主題に横笛の属性をうまく

持ち込んで構成されている」と指摘され、『枕草子』も絶賛する横笛は清少納言の個人的偏見のみならず、たしかに王朝貴公子たちの風雅を表象するものであった。

一方、箏築は『源氏物語』での登場回数^注が極めて少ない上、貴公子たちが手に取ることがない。夕顔巻で「頭中将、ふところなりける笛取り出で、吹きすましたり。」という場面で「例の、箏築吹く隨身、笙の笛持たせたるすきものなどあり。」と貴公子たちが楽しむ遊びの背景に描かれるにすぎない。

笙についても触れておくと笙は『源氏物語』中で三回、吹き手が明示される。賢木・若菜下・宿木の各巻に一回ずつである。まず賢木巻では「仲將の御子の、今年はじめて殿上する、八九ばかり」つまり頭中将の子が「聲いとおもしろく、笙の笛吹きなどする」という。若菜下巻では女楽において、源氏の「今日の拍子合はせには、童べを召さむ」という言により「右の大殿の三郎、かむの御腹の兄君」つまり髭黒の大將の三男で玉鬘にとつては第一子となることもが「笙の笛」を吹く。なお同じ場面で「横笛」は「右大將の御太郎」つまり夕霧の長男と明示されるが、主旋律を司る箏築については担い手が触れられていない。また、女楽といえは、終宴近くになって源氏に「高麗笛」が差し出されるが、この龍笛よりも小さく高い音が出る高麗笛もまたまぎれもなく「横笛」のひとつである。最後に笙が登場するのは宿木巻で「左のおほい殿の七郎、童にて、笙の笛を吹く。」と笙の吹き手はまだ童の夕霧七男である。

このように『源氏物語』における三管は、貴公子たちが手に

する横笛、物語には吹き手が登場しない箏、こどもが吹く笙と、見事に役割分担されている。

三管のうち、横笛のみが偏って貴公子たちに愛好された背景には、天皇が習得する楽器が横笛であったことが大きい。『懐竹抄』には、笛をことに愛好した天皇として、村上天皇・一条天皇・堀河天皇・高倉天皇の名が上がっている。さらに、同書内における天皇たちの笛の師匠を見てみると一条天皇の師は藤原高遠で、高遠は笛の妙曲により三位に序せられたとある。堀河天皇は、刑部卿源政長を師とし政長の息有賢はそれによって昇殿が許された。堀河帝のほかの師としては、大納言藤原俊、また、楽人・大神基政は堀河帝の笛の師になったことで従五位下に叙せられている。鳥羽天皇の師は数奇な人生で知られる藤原実国である。豊永聡美氏は「注9円融・一条のころから帝王の習得すべき主な楽器が琴から笛に移行し、以後しばらく管絃に堪能でない天皇が存在したものの、堀河・鳥羽・高倉といった熱烈に笛を愛好した天皇の登場により、帝王学として習得すべきものとしての笛の地位が揺るぎないものとなり笛の全盛時代となった。」と述べられる。天皇に愛好されたことはもちろん、その師を見ても、天皇に指南するほどの腕前の人物たちとして三位以上の公卿たちが名を連ねており、むしろ堀河帝の師である源政長や大神基政が異例なほどである。天皇たちが師匠を求めれば、公卿がそれに応じられるほど横笛がそれだけ貴族たちの間に浸透し、専門の楽人に劣らない腕前であったことが

推察される。

一方箏は田辺尚雄氏注10によれば「即ち笛は最も位が高く、笙がこれに次ぎ、箏は最も賤しい位のものであるとされて居る。(その理由は歴史的な面にあるらしい)」「箏は西アジアに起つた楽器で、中世に中央アジアの胡夷を通して支那に入つて来たものであるから、支那に於ても既に一段と位の低い蛮夷楽器とされて居たのである。かゝる所から管楽器の順位が出来たものであらう。殊に箏は高位高官の人は余り手にしなかつた。」という。『箏師傳相承』を見ても、敦兼息の従三位藤原季行や、正二位にまで昇つた藤原定能などの公卿が散見されるものの、『鳳笙相承師伝』や『秦箏相承血脈』に比べて、そもそも血脈を形成する伝承者の数自体があまりにも少ない。御遊にはかならず担い手が存在している以上、演奏者の需要はたいは少なかつたはずはないに違いないにもかかわらず、「伝承」を望むものは多くなかつたということであらうか。とすれば博雅三位が醍醐天皇の孫という身分にありながら、箏をも得意としたことは異例中の異例といえよう。とはいえ、先述のとおり博雅は宮中での御遊に都合の悪いときは参加しない(「大鏡」と記されたり、道長が優秀だがさばり癖のある人物を評するとき「博雅の如き」と引き合にだしたうえ、藤原実資がその「博雅」を「文筆・管絃者也。但し、天下懈怠の白者也」(「小右記」)と記したりするような人物であるから、博雅三位の箏愛好は箏じたいの価値を高めるといふよりは、むしろ博雅の奇矯さの方を強調するものと捉えるほうが説話の

意図に即しているのかもしれない。

かくして、当時、御遊を担う同じ管楽器でありながら、横笛と箏には明確な差異が存在し、それを踏まえて「敦盛最期」で敦盛の遺品の笛にこそ物語の重点をおく覚一本は、敦盛の遺品を横笛として描出することにより、平家の公達としてうるわしくも高貴な敦盛像を強固に構築することを意図したといえよう。改心の力をもつ笛としては箏のほうか物語の演出にはふさわしい。また、熊谷が前夜の管絃を振り返るにあたって、より特徴的かつ大音量を持つ箏のほうかより思い起こしやすいう音であろうことも想像され、さらには戦場で懐中するには大きさの上でも箏のほうに携帯の利便性があったとおもわれる。しかし、それらをおしてなお、敦盛像形成にあたっては敦盛に横笛を所持させる必要があった。さらには敦盛の公達としての優雅さに加え、笛こそが「狂言綺語のことほりと一言ひながら、遂に讃仏乗の因となる」ことのみを覚一本は強調するべく、延慶本で敦盛が箏と併せ携えていた巻物は姿を消し、また熊谷と敦盛の父・経盛との書状のやりとりも物語から削除されるの

である。

なお、覚一本とおなじく敦盛に横笛を所持させる百二十句本は、熊谷発心の動機を敦盛の笛としながら、後日談として経盛との往復書簡をも記している。ただし、覚一本が所持品を笛に変更するにあたって、携帯していた場所も延慶本の「鑑ノ引合」から「腰にさゝれたる」と変更したのに対し、百二十句本では「笛を引合せに差されたり」のままとする。笛は貴公子が懐中するものという『源氏物語』以来のイメージがあつてかもしれないが、全長四〇センチメートルほどの笛を、着衣にゆとりのある狩衣ではなく鑑の引合に差すというのは無理が生じよう。覚一本のほうか笛に重点をおく語りの意図（笛に比重をかけすぎるあまり、やや逸脱した感が拭えない記述はあるもの）においても、笛そのものへの理解においても整合性がとれている。

(表1)

| 物と信連 | 覚一本 | 延慶本 |
|--|--|-----|
| <p>A 宮のさしも御秘蔵ありける小枝と聞こへし御笛を、只今しもつねの御所の御枕にとり忘れさせたまひたりけるぞ、立かへつてとらまほしうおぼしめす。</p> <p>B 信連これを見つけて、「あなあさまし。君のさしも御秘蔵あ</p> | <p>A' 宮ハ七八丁バカリ延サセ給ヌラムと覚ル程ニゾ、檢非違使参タリケル。小枝ト云秘蔵の御笛有ケリ。夜モ昼モ御身ヲ不放給ケルヲ、忘レサセ給タルケルヲ、口惜事ニ思食テ、立テ帰ラセ給ヌベク思召ケレドモ、云ニ甲斐ナシ。</p> <p>B' 其二信連ガ追付進テ、近衛東ノ河原ノ程ニテ「御笛取テコ</p> | |

| 敦盛の遺品 | 宮の遺体と笛 | 二つの秘蔵の笛。蟬折奉納 | 宮の忘 |
|---|---|--|---|
| <p>A 錦袋にいれたる笛をぞ、腰にさ、れたる。 (中略)</p> <p>B 件の笛は、おほち忠盛笛の上手にて、鳥羽院より給はりたりけるとぞ聞えし。経盛相伝せられたりしを、篤盛器量たるによつて持たれたりけるとかや。</p> <p>C 名ヲバ小枝とぞ申ける。</p> <p>D ×</p> | <p>A 浄衣着たる死人の、頸もないを、しとみのもとにかいていできたりにけるを、たれやらんと見たてまつれば、宮にてぞ在ましける。</p> <p>B 「われ死なば、この笛をば御棺にいれよ」と仰ける小枝と聞えし御笛も</p> <p>C いまだ御腰にさ、れたり。</p> <p>D はしりいでてとりもつきまいらせばやと思へども、おそろしければそれもかなはず</p> | <p>D されどもいまをかぎりとやおぼしめされけん、金堂の弥勒に参らッさせおはします。</p> <p>E ×</p> <p>A 此宮は、蟬折・小枝と聞えし漢竹の笛を、ふたつもたせ給へり。</p> <p>B かの蟬折と申は、昔鳥羽院の御時、こがねを千両、…(蟬折の由来)…さてこそ蟬折とはつけられたれ。</p> <p>C 笛のおん器量たるによつて、この宮御相伝ありけり。</p> | <p>D 「われ死なば、この笛をば御棺にいれよ」とぞ仰ける α ×。</p> <p>C 宮なのめならず御感あつて</p> <p>る御笛を」と申て、五町がうちに追ツついてまいらせたり。</p> |
| <p>D 此筆篋ヲバ月影トゾ付ラレタリケル 又少キ巻物ヲ差具タリ</p> <p>C ×</p> <p>B ×</p> <p>A' 漢竹ノ篋篋ノ色ナツカシキヲ、紫檀ノ家ニ入テ、錦ノ袋ニ入ナガラ、鎧ノ引合ニ指レタリ。</p> | <p>A 浄衣キタル死人ノ頸モナキヲ、昇テ通りケルヲミレバ、宮ノ御ムクロナリ。</p> <p>C 御笛御腰ニ被指タリ</p> <p>D + α ハヤ被討サセ給ニケリト見進セケルニ、ハヒ出テ、懐付マイラセバヤトハ思ヘドモ、サスガニ走りモ出ラレズ。命ハ能惜キ者哉トゾ覚ケル。</p> <p>B' 『此笛ヲバ、我死ニタラム時ハ、必ズ棺ニ入ヨ』トマテ被仰ケルトゾ、佐大夫ハ後ニ二人ニ語りケル。</p> <p>β 御笛ハ御秘蔵ノ小枝也。</p> | <p>D' + α イカナラム世マデモ、御身ヲ放ジト思召サレドモ…奈良ヘ落サセ給ベキニ定ヌ。</p> <p>E 小枝ト申シ御笛ヲ、最後マデ御身ヲ放タレズ</p> <p>A 此宮、小枝、蟬折ト云秘蔵ノ御笛ニアリ。</p> <p>D' 蟬折ヲ弥勒ニ奉ラセ給フ。</p> <p>B 此ノ御笛ハ、鳥羽院ノ御時、奥州ヨリ砂金千両奉リタリ…(蟬折の由来)…此笛ヲバ「蟬折」トハ名付シカ。</p> <p>C' 鳥羽院ノ御物ナリケレドモ、其御孫ノ御身トシテ、伝持セ給タリケルガ</p> | <p>D ×</p> <p>ソ参タレ」ト申ケレバ、 C' 実ヤカトテ不斜メ悦シゲニ思召タリケレバ、腰ヨリ拔出テ進セタリケリ</p> <p>α 佐大夫宗信(檢非違使の説明)</p> |

三、敦盛の笛、変遷の過程

― 篳篥から横笛へ、小枝から青葉の笛へ ―

敦盛遺愛の笛が、月影という名の篳篥から、小枝という名の笛へと変遷するにあたって、覚一本が高倉宮以仁王の物語を再利用していることはすでに多くの指摘がある。以下、高倉宮以仁王の笛が描かれる場面と敦盛の笛描写を、覚一本・延慶本の比較による対照表1に見てみたい。

表1中「敦盛の遺品」Bに掲げた笛の由来譚は、笛を熊谷谷心の機縁とする語り本諸本のなかでも覚一本にしか見られない特徴的な記事であり、表中「二つの秘蔵の笛。蟬折奉納」Bに掲げた以仁王所有の蟬折を再利用したものである。以仁王が所有したふたつの笛である蟬折と小枝双方の要素を撰取しながら、敦盛の遺品は、篳篥の月影から横笛の小枝へと再構築された。

(表2)

| 源平盛衰記(敦盛の「やえだ」) | | 覚一本(以仁王の「蟬折」) | | 延慶本(以仁王の「蟬折」) | |
|-----------------|-------------|---|-----------------|---------------|--|
| | b | | c | | d |
| | 砂金百両 | こがねを千両 | 宋朝の御門へをくらせ給ひければ | 砂金千両 | 時ノ主上へ進セ給タリ。唐土国王 |
| c | 宋朝に渡されて | 宋朝の御門へをくらせ給ひければ | | | |
| d | よき漢竹を一枝取り寄せ | 返報とおぼしくて、いきたる蟬のごとくにふしのついたりたる笛竹を、ひとよをくらせ給ふ | | | 御返報トオボシクテ、幹竹ヲ一本献ル。 (略)口ノ穴ト節ト覚シキ所ロニ、生身ノ蟬ノ様ナル物有ケリ |
| e | 天台座主の明雲僧正 | 三井寺の大進僧正覚宗 | | | 三井寺ノ覚祐僧正 |

繰り返しを多用する語りの性質が顕著に現れた覚一本の手法であろうが、『平家物語』が多く受容され、またいつでも前の記事にもどって読み返せる形態になるにあたっては、この重複する小枝の存在は捨て置けないものであったらしい。^{注11} 増補改修を多く含む『源平盛衰記』は以仁王所有の笛についてはほぼ先行する延慶本や覚一本の蟬折と小枝をそのまま踏襲しつつ、敦盛所有の笛には以下のような改変を加える。まず「色なつかしき漢竹の笛を、香もむつまじき錦の袋に入れて、鎧の引合に差されたり」と、百二十句本と共通する描写がある。そして、語り本諸本のうちでも覚一本のみが打ち立てていた、敦盛所有笛の由来については以下のとおり新たな説を打ち立てる。

かの笛と申すは、a父経盛笛の上手にておはしけるが、b砂金百両、c宋朝に渡されて、dよき漢竹を一枝取り寄せ、殊によき両節の間を一よ取り、e天台座主の明雲僧正に仰せられて、f秘密瑜伽の壇に立てて、七日加持して、

| | | |
|-----------|-------------------------------------|---------------------|
| f | 秘密瑜伽の壇に立てて、七日加持して、壇上にて、七日加持して、ゑらせ給へ | 護摩壇ノ上、一七ヶ日加持セサセ給テ後、 |
| 秘藏して彫られし笛 | 秘藏して彫られし笛 | 笛ニ萬レタリケリ |

秘藏して彫られし笛なり。子息たちの中には、敦盛、器量の仁なりとて、七歳の時より伝へて持たれけり。g夜更くるままに冴えければ、さえたど名付けられけるなり。

(傍線引用者)

傍線部 a は覚一本「敦盛最期」の「おほじ忠盛笛の上手にて」「経盛相伝せられたり」に相当しよう。b f まででは以仁王の笛蟬折の由来の再利用である。覚一本・延慶本の以仁王の蟬折と対照して表 2 に見たい。

覚一本における敦盛の小枝は、以仁王の蟬折を彷彿とさせるような、鳥羽院を基点とする由来を持ちつつ名称は小枝であったが、『源平盛衰記』は、この蟬折の傳承の型を利用しつつも、経盛じしんが取り寄せたこと、またその対価や、加持をつとめた僧などに独自性を加え、一見似通うものの、まったく別の傳承ルートを作り上げている。さらに注目すべきが傍線部 g の名称由来であり、訓みとしては「さえた」であるものの、「夜更くるままに冴え」というのは延慶本の筆策「月影」の要素を採り込んだ新たな笛の名である。諸伝本を整理しつつ、再構築を試みた形跡がうかがえよう。

さらに後代に下つて、幸若舞の『舞の本』における『敦盛』^{注13}では、さらなる貪欲な撰取と、それらの整合性をとるための改變が伺える。

いわゆる「敦盛最期」では原因がわからない、敦盛ひとりのみが逃げ遅れているという事態に『舞の本』は「御運の末の悲しさは、漢竹の横笛を大裡に忘れさせ給ひ、…(中略)…取りに返らせ給ひて、かなたこなたの時刻に、はや御一門の御座船を、遙かの沖へ押し出す。」と、理由付けをする。笛を忘れるというモチーフは以仁王によつたものであろうが(もつとも以仁王の場合は宮本人ではなく信連が代理で走る)、敦盛が討たれなければならぬ事態を招く要因すら笛、しかも明確に横笛と明記する笛、に帰結させていることは、敦盛を語るうえでの重心がまぎれもなく笛におかれていることが伺えよう。『舞の本』の『敦盛』にはこの他にも多くの増補が見受けられるが、筋立ては『平家物語』諸本とかわらず、敦盛は熊谷によつて討たれ、その遺骸から笛が発見される。発見された遺品は以下のとおりである。

鎧の引き合せに、漢竹の横笛を、紫檀の家に筆策を添へて差されたり。又馬手の脇をみてあれば、巻物一卷おはします。

『平家物語』諸本がつたえた遺品すべてを併せ持ち、これらの遺品は熊谷によつてまず御曹司義経の見参に入れられる。唐突に登場した義経は笛の由来を語る。

この笛は某が見知るところの候。それをいかにと申に、一

年、高倉の宮、御謀叛企ての時、天下に小枝、蟬折とて、二管の笛あり。蟬折をば、三井寺にて、弥勒に回向し給へり。小枝をば、御最後迄持たせ給ふ由、承るが、水瀬光明山にて、討たれさせ給ひし時、此笛、平家の手に渡る。一門の其中に、笛に器用を召されしに、弱冠なれども、敦盛は笛に器用の人也とて、下されけると承る。

同一題材を再利用したことによる混乱を『源平盛衰記』が試みたような分別によって回避しようとするのではなく、『舞の本』は小枝の笛を、高倉宮以仁王の遺品と敦盛遺品と同一視とすることによって、収束させた。『平家物語』全体を語るのではなく、敦盛の物語のみをつたえる作品であつてこそ可能な手段でもあろう。

続けて、『平家物語』とは筋立てじたいが異なるが、後日談的な性格をもつ世阿弥作の能『敦盛』^{注14}を確認したい。敦盛の没後、熊谷が出家してのちの出来事ながら、能『敦盛』でもやはり笛が重要な小道具となっている。舞台にはまずワキの熊谷が敦盛との決戦の地となつた一の谷に登場している。

急ぎ候程に。津の國一の谷に着きて候。誠に昔の有様今のやうに思ひ出でられて候。又あの上野に當つて笛の音聞え候。

やがてシテの敦盛が草刈男の姿で登場し、零落した我が身を憂える。笛について尋ねる熊谷に草刈男には(地謡)。

身の業の。好ける心に寄竹の。好ける心に寄竹の。小枝蟬折様々に。笛の名は多けれども。草刈の吹く笛ならばこれ

も名は、青葉の笛と思し召せ。住吉の汀ならば高麗笛にやあるべき。これは須磨の鹽木の海人の焼残と思しめせ海人の焼残と思しめせ
(傍線引用者)

「小枝蟬折」というあきらかに『平家物語』の以仁王所持品を踏まえた上で、自らの笛は「青葉を刈る」草刈男の吹くものであるから、「青葉の笛」とでも思っていただければ」という。籥の「月影」でも、以仁王とは別物の「小枝」や「さえ(牙)だ」でも、以仁王と同一の「小枝」でもなく、能『敦盛』が所持したのは「青葉の笛」であつた。敦盛遺愛の笛といえはこの青葉の笛がもっともよく知られた名となつていくのは周知のとおりである。

なお、この能『敦盛』では一の谷という地名に加えて、須磨の名も多用されることに留意しておきたい。須磨といえは光源氏流謫の地として知られるところであるが、『平家公達草紙』で維盛の舞う青海波が光源氏もかくやと描写されたように、敦盛もまた光源氏に重なる公達としてのイメージがより強く要請されたものであろうか。

四、「青葉」という笛の問題

現在、敦盛の笛としてもっとも浸透している名はまぎれもなく「青葉の笛」である。文部省唱歌「青葉の笛」はもとより、二〇〇七年に刊行された、あまみきみこ氏の絵本も「青葉の笛」というタイトルで内容は敦盛と熊谷の物語である。^{注15}「青葉の笛」という名称は確実に敦盛所持の笛としての固有性を獲得

している。

しかし、能『敦盛』に見られる「青葉の笛」の文言は文脈から推察すれば固有名詞ではなく、修辭構成の成果としてのものである^{注16}。また、「青葉の笛」の用例としてたびたび挙げられる『十訓抄』の「笛の最物には、青葉、葉二、大水龍、小水龍、頭焼、雲太丸、これらなり」という記事であるが、これもそのまま読むには危険がある。『十訓抄』（一二五二年成立）同様に笛の名物を記す、先行書に『江談抄』（一一〇四―八年か）『教訓抄』（一二三三年成立）がある。それぞれの記述を以下に引用する。

大水龍。小水龍。青竹。葉二。柯亭。讚岐。中管。釘打。庭筠（『江談抄』四八）

逸物者、大水龍、小水龍、青竹、葉二、柯亭、穴貴、讚岐、中管、釘打、庭筠、アマノタキサシ、シタチ丸（『教訓抄』巻第八）

いずれも「青竹、葉二」の順に記しており、つまり『十訓抄』の「青葉」は「葉二」の「葉」が衍字となったものかと推察しても大過はあるまい。『続教訓抄』では「青葉」を「或、葉二同管云々」と割注し、『拾芥抄』でも「葉二」を「江談曰、朱雀院鬼笛、又号青葉、歟」と割注している。「葉二」と「青葉」に混同や同一視が何え、「青葉」という名器には存在の危うさを感じられよう。

しかし、それにもかかわらず「青葉の笛」は敦盛遺愛の笛として確固たる地位を確立し、現在でも神戸市須磨区の須磨寺に

はその名もまさに「青葉の笛」が寺宝として伝えられている。ところが、この笛の史料上の初出である須磨寺の『當代歴山』（応永三十四年（一四二七）条によると、そこには「小枝笛」と記されているという。その後、文様ごろまでは寺でも「小枝」「青葉」が併用され、慶安三年（一六五〇）刊行の『兵庫須磨名所記』が「青葉」を用いて以来、「青葉」に統一されたこのことである^{注17}。

この名所記に合わせた統一というのは看過できない事実ではあるまいか。実は敦盛の笛に限らず「青葉」という名の笛は全国各地に伝わっており、たとえば福井県和泉村には源義平の遺品たる「青葉の笛」がある。「青葉の笛」とは、そもそも鹿児島県国分寺市の台明寺にあった「青葉の竹林」とよばれる宮中に献上するための竹によって作られた笛のことをいう説もあり、それに従えば「青葉の笛」とは固有名詞ではなく、いわばストラディバリウスのような名器のブランド名であったと推察され、おのずと名器「青葉の笛」は各地に存在したはずである。須磨寺以外にも、敦盛の「青葉の笛」が少なくとも北海道の姥神大神宮・酒蔵大関長谷部家・山口県下関市の赤間神宮のもの^{注18}と三本は確認されているという。それら各地の「青葉の笛」に対し、須磨寺は能『敦盛』にも登場する敦盛にゆかりある地の「青葉の笛」こそが、本物であることを周知するとともに、須磨寺内でも混乱のあった名称の一本化を図った。能『敦盛』で草刈男が自らの笛を「青葉の笛」というとき、元来の意味としては修辭にすぎなかったかもしれない。だがそのことは

を契機に、すでに各地に存在したであろう銘品「青葉の笛」の存在価値は、敦盛に由来することで揃って飛躍的に高められ、さらには、自らを連生（熊谷）と称するような語り手たちが多く存在したように、各地に敦盛の笛が生まれ、それらがさらに敦盛の伝承したいをゆきわたらせたのではあるまいか。そしてその伝承こそが、書かれた『平家物語』の「月影」や「小枝」を凌駕し、敦盛の笛を「青葉の笛」に上書きさせるだけの威力となつて、近世そしてついには現代にまでいたつたのである。

おわりに

夢幻能『敦盛』に登場するシテ・敦盛はまず草刈男の姿であられる。草刈男の笛といえは、お伽草子『烏帽子折』でも知られる用明天皇由来の笛であり、『烏帽子折』にもその形状は「横笛」であると明記される。各地の「青葉の笛」はどれも横笛であり、王朝の管絃で奏でられる龍笛の風雅とはまったく別種の機能を持ちつつも、しかし形態としてはまぎれもなく横笛である笛が、民間において存在し、それらが「青葉の笛」の名によって、敦盛伝承と横笛の結びつきをより強固にしていたのではないか。

敦盛の物語が成立した当初、父子の悲哀を語る物語の添え物であつたはずの箏篋は、その特性ゆえに発心説話の核となりつつも、敦盛像形成の過程で、より公達にふさわしい笛たる横笛へと転化させられた。横笛は敦盛の風雅を構築し、やがて世阿

弥が夢幻能のシテ敦盛の仮姿に草刈男を据えることもまた、まぎれもなく、この横笛という、物語の重要な小道具に導かれてのことに違いない。

やがて「青葉の笛」の名は敦盛伝承そのものを代弁し、敦盛説話における主体としての地位を確立する。敦盛の物語が、すなわち笛の物語となつた画期は、覚一本らによる箏篋から横笛への転換に他ならない。敦盛が所持する笛が横笛となつたときから、その物語は、終始、敦盛が持つ横笛の力によって導かれてきたといえよう。

注

- 1 以下、覚一本文は岩波書店「新日本古典文学大系」による。
- 2 『懐竹抄』『教訓抄』などの楽書にその思想がみられる。
- 3 以下、延慶本文は勉誠出版『延慶本 平家物語』による。
- 4 なお、『源平闘諍録』では熊谷に討たれたのは敦盛ではなく業盛である。敦盛説話のフィクション性がより強調されよう相異だが、今回は敦盛を考察対象とするため業盛の説話となつている『闘諍録』には言及をしないものとする。

- 5 佐谷眞木人「『平家物語』と笛―巻第九「敦盛最期」の形成をめぐる―」（『三田国文』一三卷 一九九〇年六月）↓佐谷眞木人『平家物語から浄瑠璃へ 敦盛説話

- の変容」(慶応義塾大学出版会、二〇〇二年 所収)
- 6 龍の声である龍笛や鳳の声である笙は、人から神に伝えるための音ではなく、神の声や音そのものの表象ということになるだろうか。
- 7 『十訓抄』下 十の二十六、『古今著聞集』七二六、『體源鈔』五が同話として指摘できる。
- 8 利澤麻美「音楽―源氏物語における横笛の役割」(増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹編『源氏物語研究集成』第一巻、風間書房、二〇〇二年 所収)
- 9 豊永聡美『中世の天皇と音楽』(吉川弘文館、二〇〇六年)
- 10 田辺尚雄『笛―その芸術と科学』(わんや書店、一九四七年)
- 11 覚一本は以仁王の笛は「こえだ」、敦盛の笛は「さえだ」としている。語る上では音の区別は意識されていたということになる。
- 12 前掲3において佐谷氏は「源平盛衰記において高倉宮に關する記事の中に「小枝」の笛が一度も登場しないことになる」と指摘されるが、巻第十三「高倉宮信連戦事」には「其中ニ小枝ト聞エシ漢竹ノ御笛ノ、殊ニ御秘蔵アリケルヲバ」「小枝ヲシモ忘レヌル事ノ口惜サヲ」とあり、宮の遺体発見においても巻第十五「南都騒動始事」に「御笛ト云ハ御秘蔵ノ小枝也」とある。『源平盛衰記』巻第十三・十五本文は三弥井書店『源平盛衰記』により
- 13 卷第三十八本文は新人物往来社『新定源平盛衰記』によつた。
- 14 以下、「舞の本」『敦盛』本文は岩波書店「新日本古典文学大系」による
- 15 以下、能『敦盛』本文は『謡曲大観』による
- 16 あまんきみこ／文、村上豊／絵、西本鶏介／監『青葉の笛』(ポプラ社、二〇〇七年)
- 17 谷口廣之「青葉の笛―史跡と遺品―」(『阪南論集』三五―四〇、二〇〇〇年三月)
- 18 小池義人『滅びの美「敦盛」―須磨・一の谷・須磨寺』(神戸新聞出版センター、一九八五年)
- 19 『三國名勝図会』「竹林山衆集院台明寺」の項目による(五代秀堯・橋口兼柄編纂『三國名勝図会』(青潮社、一九八二年)。なお、この記述について、機会を改めて論じたい。